



ことばをたずねて（二）

からいも普通語

高 城 隆 一

【はじめに】

前号では、（ア）日本国内を含む世界各地の言語・方言の多くが世代間で継承されず、話し手が著しく減っていること、（イ）それを受け消滅の危機が叫ばれおり、鹿児島県内で話されてきた伝統的な方言もその例外ではないこと、（ウ）方言と共通語は二者択一のものではなく、両方を習得できる可能性が十分にあること、（エ）普段使っている自分がことばを意識することの大切さについて考えた。

伝統的な方言を記録に残そう、守つていこうという活動は県内にも複数ある。その中で、国分昔ばなし大学再話研究会（代表：福迫三枝子氏）が、平成三十一年四月に『昔話再話集「いもゴロリットン』』を発行した。「再話」とは、「耳で聞いて聞きやすい形に、また語った時に映像がつながって語りやすい形に整える作業」のことであるという。この再話集中には鹿児島に伝わる昔話が十五話、「共通語版」と「土地ことば版」で収録されている。このうち「土地ことば版」では「再話を手がけた担当者の土地ことばでの再話」がな

されている。昔話だけでなく、「土地ことば」も後世に残したいという思いから、音声CDの準備も進めているという。

さて、今回は少し視点を変えて、巷で「からいも普通語」と呼ばれていることばについて考えたい。「からいも」は言うまでもなく「さつまいも」のことである。「普通語」はここでは「共通語（標準語）」という意味である。

【からいも普通語】とは何か

「からいも普通語」と聞いてどんなことばを思い浮かべるだろうか。学問的な定義があるわけでもなく、それぞれが自由なイメージを持つていて構はないのであるが、ここではとりあえず、「共通語と鹿児島のことばを混ぜたようなもの」のようにぼんやりと考えおいて、話を先に進めてみたい。

現在、国内の方言は多かれ少なかれ共通語の影響を受けており、これは鹿児島においても例外ではない。ただし、全国各地の方言が等しく共通語に置き換わっているかというと

そうではなく、各地の伝統的な方言と共通語との「接触」によって、新しい方言が生まれていることが報告されている。鹿児島における

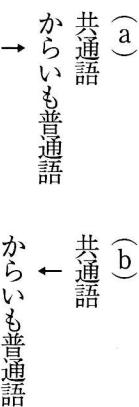
「からいも普通語」の単語や文法はほとんどが共通語的ではあるものの、少数民族ながら伝統的な方言で使われる単語や文法が使用されることもあるし、共通語との「接触」によって新しく生まれた単語や文法もある。後者については、今から約二十五年前の平成七年に書かれた木部暢子氏（元鹿児島大学教授）の「方言から「からいも普通語」へ」に「最近鹿児島で生まれた新語形・新表現」として例が載っているので引用しておく…

ワッゼー（非常に）、イツキ（すぐに）、ラ

フル（黒板消し）、チレテル（散らかっている）、ケー（質問の終助詞。例・アシタガッコーやスミケー）、ガ（終助詞。例・イッショニイクガ）、ナイデシタ（なかったです）、ナカツタデシタ（なかつたです）、デスヨ・ダヨー（そうですね）、ヤスクデ（安い値段で）、ゼンブデシタ（全部売切れました）、オツカレサマ（最初に会ったときの挨拶）

ここで、先に述べた「両者のあいだ」とはどこなのかということについても考えておきたい。先に挙げた「方言から「からいも普通語」へ」に興味深い記述がある。

「からいも普通語」の内容をさらに詳しく調査してみると、その位置づけ方には人によつて微妙な差があることがわかつてきた。大きくは二種類で、「からいも普通語」を（a）方言を基準にしてそれより上と位置づけるタイプと、（b）共通語を基準にしてそれより下と位置づけるタイプである。



人が使うかに対する回答としては、「東京に出たことのある人が鹿児島に帰つてきたとき」というものと、「鹿児島から出したことのない人」というものと、まつ

たく相矛盾するような一種類の回答が返ってくる。最初の回答は（中略）方言が基準になつて、「からいも普通語」はそれよりや上方に位置づけられた（a）のタイプである。これに対し二番目の回答は（中略）共通語を基準にして、「からいも普通語」はその下に位置づけられおり、（b）のタイプである。

「上」「下」という表現には多少の違和感を覚えなくもないが、ひとまずこれを脇に置いて要約してみると、（a）のタイプで捉える人にとって「からいも普通語」は方言とは異なるもの（非共通語）なのに對し、（b）のタイプで捉える人にとって「からいも普通語」は共通語とは異なるもの（非方言）といふ区別をしているものと考えられる。

一方、上の記述は約二十五年前のものであることから、例えば当時九十歳であつた人は明治生まれということになる。上記の「高年層」と「若年層」がそれぞれどのくらいの年齢までを含んでいるかといふことや、「からいも普通語」の正確な成立時期は不明であるが、（a）のタイプに含まれる「高年層」の多くは母語（ないしは母方言）として伝統的な方言を身に付けていた人たちであると考えられる。そうであれば、共通語的な単語や文法が用いられる「からいも普通語」を共通語（の一種ないし方言ではないもの）と捉えて

中には、自分たちが普段使つていることばである「からいも普通語」を指して「鹿児島弁」と呼ぶ人が大半である。つまり、上記の「若年層」よりさらに若い彼らも「からいも普通語」を（b）のタイプで捉えていることになる。これは彼らに伝統的な方言と「からいも普通語」の區別がついていないということではない。むしろ「おじいちゃん・おばあちゃんのことば」と「自分たちのことば」が異なるという認識は明確に持つてゐる。これに加えて、どちらも共通語とは異なるという認識も持つており「おじいちゃん・おばあちゃんの鹿児島弁」と「自分たちの鹿児島弁」といふ区別をしているものと考えられる。

木部氏によると「総じて（a）のタイプは高年層や男性に多く、（b）のタイプは若年層や女性に多い」という。ここでは、このうち「高年層」と「若年層」という世代差に注目して両者の違いを考えてみたい。

【世代による捉え方の違い】

【共通語の影響】

ちょうど上の記述が世に出たころに生まれ、鹿児島市で育つた筆者と同年代の友人たちの語の影響を受けており、これは鹿児島においても不思議ではない。

先に、「国内の方言は多かれ少なかれ共通語の影響を受けており、これは鹿児島におい

ても例外ではない」と述べた。では、鹿児島において方言が共通語の影響を受けていると、いうのは、具体的にどういうことであろうか。ここでも（a）のタイプと（b）のタイプの違いに相当する二種類の捉え方が考えられる。すなわち、「からいも普通語」を「新たに入った共通語が方言の影響を受けたもの」と見るか「方言が共通語の影響を受けて変化したもの」と見るかという違いである。前者の捉え方であれば（a）のタイプと同じように、「からいも普通語」と方言の間に境界を見いだしていることになる。一方、後者の捉え方であれば（b）のタイプと同じように、「からいも普通語」と共通語の間に境界を見いだしていることになる。

「からいも普通語」は、母語として伝統的な方言を身に付けた人たちが、いわば第二言語として共通語を習得したことで生まれたと考えられる。すなわち、第二言語である共通語を話すときにも母語である伝統的な方言の特徴（主に音声）を反映した話し方をするこにより、冒頭で示した「共通語と鹿児島のことばを混ぜたようなもの」のような印象が持たれる「からいも普通語」が誕生したのではないだろうか。

若い世代の読者にも想像しやすい類例としては、外国語学習が挙げられる。外国語を勉強するときに単語や文法は覚えられても、母語者のような発音を身に付けるのは難しいと感じることがあるだろう。インターネットなどで母語話者の音声に気軽にアクセスでき

る現代でもそうであるということは、音声を聞いて学ぶ手段や機会が限られていた時代に共通語を学んだ人たちが、母語である方言を話すときと同じようなアクセントやインтоーションで「共通語」を話していたとしても不思議ではない。

時代が下るにつれて、子や孫に方言を教えずに共通語で話しかける人が増加した。そのときに「共通語」として使われていたのもおそらくこの「からいも普通語」であろう。伝統的な方言を聞いて育った人が伝統的な方言を母語として身に付けるように、「からいも普通語」を聞いて育つた人は「からいも普通語」を母語として身に付ける。母語として「からいも普通語」を習得した世代は、「からいも普通語」が「第二言語としての共通語」であつたという歴史など知る由もない。そのため彼らが「からいも普通語」を「方言が共通語の影響で変化したもの」と考えるのも自然なことである。

すなわち、上記の（a）のタイプと（b）のタイプの違いに相当する二種類の捉え方は、「成り立ちとしては「新たに入った共通語が方言の影響を受けたもの」であるが、時代が下るにつれて「方言が共通語の影響を受けて変化したもの」として再解釈されるようになったために生じた」と説明できる。

なお、長期的な視点では「共通語が新たに入ってきた」と「自体に注目すると、共通語の影響によって「方言」と呼ばれるようになつたために生じた」と説明できる。
（たま りゆういち・東京大学大学院博士課程／日本学術振興会特別研究員DC／国立国語研究所）

木部聰子（1995）「方言から「からいも普通語」へ」『変容する日本の方言』・『言語』別冊、166-177.
東京：大修館書店
国分昔ばなし大学再話研究会（2019）『昔話再話集「いまゴロリットン」鹿児島・国分昔ばなし大学再話研究会
ロング・ダニエル（2013）「奄美大島のトン普通語と沖縄本島のウチナーヤマトウグチの言語形式にみられる共通点と相違点」『日本語研究』33: 87-97.

とも「言えるかもしない。もしくは、このまま伝統的な方言の継承がなされない状態が続くと、将来的には「方言」と呼ばれるものが伝統的な方言から「からいも普通語」に変化した」と言われるようになるのかもしれない。伝統的な方言が消え去るのは、前号で述べた文化や多様性の保持の観点から問題である。なにより、鹿児島に縁を持つ身としては物悲しく感じるのではないだろうか。
鹿児島に限らず现代社会においては、方言と共通語との「接触」はもはや避けられない状況にある。その中で、今後鹿児島で生まれ育つ人々の母語が前段落の未来予想図通りの状態になるか、それとも伝統的な方言の継承が再開されるかは未確定である。後の世代の人々がどのようなことばを母語として身に付けるのか。先に生まれた我々の選択が、方言の将来を決める一翼を担っている。